体育科　研究主題

主体的に学習に取り組む児童の育成
―「楽しさ」から「没頭」へ　第１学年「投の運動遊び」を通して―

矢　口　幸　平

〈研究概要〉

本研究は、小学校第１学年の体育授業において、「楽しさ」を土台としつつ、児童を「没頭」へと導くことで、主体的に学習に取り組む態度を育成するためにどのような授業が必要かを明らかにしようとしたものである。

本研究では、「身体的有能さの認知」「自己決定場面」「集団的達成」の３つを没頭へのエネルギーとなる要素と捉え、視点を基に３つの手立てを行い、その結果を ALT-PE 観察法、質問紙調査（単回帰分析）、学習カード、児童の観察によりまとめた。

本研究の視点として、「児童が体育の授業の中で『没頭』して運動遊びに取り組むことで、主体的に学習に取り組むことができるようにする。」とした。

手立てとしては、①身体的有能さの認知を促す教材・教具や教師の関わりの工夫、②様々な自己決定場面の保障、③集団的達成が生まれる学習過程の工夫、以上の３つを取り上げて実践を行った。

その結果、ALT-PE 観察法による学習従事率の高さや、抽出児童の観察・学習カードの記述から、児童が試行錯誤しながら課題に向かい続ける「没頭」の姿が見られた。また、質問紙調査の単回帰分析において、学習従事率と「有能さ」「自己決定」「集団的達成」の間に有意な関連が確認された。

このことから、児童を没頭へと導く３要素の有効性と、主体的に学習に取り組む態度を育成するための授業の姿を明らかにすることができた研究であると言える。

〈キーワード〉

主体性、没頭、投の運動遊び、身体的有能さの認知、自己決定場面、集団的達成、ALT-PE 観察法、単回帰分析

Ⅰ　研究主題について

１　主題設定の理由

「あなたは、運動することが大切だと思いますか。」この問いに対して、ほぼ全ての大人が「はい」と答えるだろう。それは、運動が心身の健康を保つだけでなく、人生を豊かにするものであると知っているからである。体育の歴史を振り返ると、戦前の体操中心の体育から始まり、1980年代頃から、生涯にわたって継続的に運動に参加する人間の形成を目指す動きが、世界中で見られるようになった。これには、豊かな生活を送ることが社会的な指標にされるようになってきた背景がある。このような体育の捉え方は現在にも通じており、継続的に運動に参加することは、子供たちが将来心身共に幸せに生きていくための重要な基盤となる。そのためには「運動は健康のために必要だ」という価値の理解（知識的側面）と、「運動が楽しい」「好きだ」という肯定的な心情（経験的側面）の両輪が不可欠である。

一方で、子供たちにとって運動とは「将来の健康のため」に行うものではない。子供たちにとって運動は、理屈抜きに「楽しいから」「好きだから」行うことがほとんどである。特に小学校段階では、第３学年から始まる保健領域において、価値の理解（知識的側面）を深めていく際に、運動領域との関連を重視して、運動に関する内容を充実して示すこととしている。低学年の時期に運動が好きになると、その後運動に親しむ機会が増えることからも、低学年の時期に徹底的に「運動が楽しい」「好きだ」という経験を積み重ね、肯定的な心情（経験的側面）の素地を作っておくこと

が、将来的な価値の理解（知識的側面）を深める土台として極めて重要であると考える。

しかし、単に「楽しい」と感じているだけでは、休み時間の遊びと変わらない。体育科の授業である以上、その活動を、児童自らが工夫や改善を試みる「学び」へと質的に高めていく必要がある。そのためには、楽しさが一時的なもので終わらず、児童が夢中になって「没頭」する体験へと深まらなければならない。ここで言う「没頭」とは、試行錯誤しながら、その活動にのめり込んでいる状態を指す。児童が何かに「没頭」しているとき、そこには教師の指示を待つ姿はなく、自ら課題を見つけ、挑戦し続ける「主体性」が発揮されているからである。

そこで本研究では、「楽しさ」を土台としつつ、児童を「没頭」へと導くためのエネルギーとして、以下の３つの要素に着目し、その構造を整理した（図１）。



図１　楽しさ・没頭・主体性と３つの要素の関係

１つ目は、身体的有能さの認知である。これは、投げた物が的に当たり「倒せた！」「届いた！」と実感できる場面で生まれる。特に低学年では、自分の行為に対する結果が即座に分かる教材を用いることで、この感覚は強く刺激され、「やった！」というできた喜びにつながる。この「できた」という即座に得られる実感こそが、「もう一回やりたい」という強力なエネルギーとなる。２つ目は、自己決定場面である。これは、自分に合った場や用具を選び「これならできそう」「こっちがいいな」と自ら決定する場面で生まれる。与えられた課題ではなく、自分で決めた課題であるからこそ、失敗しても「もう一回！」というエネルギーが持続すると考える。３つ目は、集団的達成である。これは、友達と声を掛け合ったり、力を合わせて記録に挑戦したりして「すごいね！」「がんばろう！」「みんなでできたね！」と喜びを共有する場面で生まれる。個人の楽しさが集団の達成へ寄与することで、学びへのエネルギーはより一層高まり、個人の活動への没頭を加速させ、持続させる推進力となると考える。

本研究では、「投の運動遊び」としての楽しさが保障された中で、上記の３つの要素が機能的に働く授業を構成する。そこで生まれる没頭体験こそが、第１学年における「主体的に学習に取り組む態度」の現れであると捉え、その有効性を授業実践を通して明らかにしていきたい。

２　教科の研究主題との関わり

体育科では、「主体性を育み、運動への有能さを認知することができる体育授業の工夫」という研究主題を掲げている。目指す児童像は「子ども達の学び続ける主体性を育み、子ども達が有能さを認知することができた姿」である。本研究主題を「主体的に学習に取り組む児童の育成」としていることからも、本研究は教科の研究主題と関わっている。

３　主題にせまるための方策

研究主題にせまるために、次のような研究の視点と手立てを講じ、実践を通して検証する。

視点

児童が体育の授業の中で「没頭」して運動遊びに取り組むことで、主体的に学習に取り組むことができるようにする。

＜手立て＞

(1)　児童が体育の授業の中で「没頭」して運動遊びに取り組むことができるように、身体的有能さの認知を促すような教材・教具や教師の関わりの工夫を行う。投げた瞬間に結果がわかるような教材を用いたり、できた瞬間に焦点を当ててフィードバックを行うことで、児童がより「できた！」という感覚を自覚できるようにする。

(2)　児童が体育の授業の中で「没頭」して運動遊びに取り組むことができるように、授業内で様々な自己決定場面を保障していく。児童自身が難易度や課題を調整でき、スモールステップで達成感を味わえるものや、複数の選択肢から自らの興味・関心に応じて選ぶことができるものとする。

(3)　児童が体育の授業の中で「没頭」して運動遊びに取り組むことができるように、集団的達成が生まれるような学習過程の工夫を行う。単元前半では個人の「できた」、単元後半では全体の「できた」に焦点を当て、集団的達成を味わえるようにする。

手立てに関わる検証方法

(1)　主体的に学習に取り組んでいたのかを、授業中の姿の観察から見取る。

ＡＬＴ－ＰＥ観察法を用いて授業中の行動を分析し、学習従事および非学習従事の頻度を追跡し比較することで、変容があったのか検証する。

(2)　質問紙調査を行う。

本授業における児童の「主体的に学習に取り組む態度」の変容を捉えるため、Deci&Ryan(2000)の自己決定理論および、西田(1989)の研究や櫻井（2019）の文献を参考に、「楽しさ」「有能さ」「自己決定」「社会的達成」の４因子 12 項目からなる質問項目を作成し、実施する。

(3)　学習カードへの記述を分析する。

「身体的有能さの認知」「自己決定場面」「集団的達成」に関連する語彙の記述が見られるのかを分析し、手立ての有効性を検証する。

(4)　単回帰分析を行う。

質問紙調査の回答データを用い、単回帰分析を行う。「学習従事率」を目的変数とし、「楽しさ」「有能さ」「自己決定」「社会的達成」の４因子を説明変数として分析する。各要素が児童の没頭体験や態度の形成にどう影響したのか、統計的に検証する。

［参考文献］

高橋健夫（2003）体育授業を観察評価する：授業改善のためのオーセンティック・アセスメント　明和出版
Ryan,Richard M.&Deci,Edward L.（2000） Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. American Psychologist,Vol55(1),68-78.
西田保（1989）体育における学習意欲検査（AMPET）の標準化に関する研究　体育学研究　第 34 巻　第 1 号
桜井茂男（2019）学びのエンゲージメント：主体的に学習に取り組む態度の評価と育て方　図書文化